

gunzou. 2022.7

連載

題名	事務に狂う人々		
筆者	阿部公彦		
No.	2.	副題	事務の七つの顔
備考			

刷出

群像
22年7月号

学校の漱石

漱石は英語教育について実に真面目だった。真面目すぎる、と言つてもいいほどだった。学生の出席をとるときにわざわざ名前を Mr. と呼んだり。ちよつかいを出してきた生徒には早口の英語でまくしたてたり。こうした漱石の教師像は『坊っちゃん』や『吾輩は猫である』で戯画的に描かれる人物たちの姿とあわせて考えたと滑稽にさえ思えるかもしれない。しかし、その裏には教師としての不器用なほどの実直さが垣間見える。

金子健二は『人間漱石』の中で、次のようなエピソードを紹介している。帝大で講師として教え始めた漱石はジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』を教科書として指定した。これに対し学生は、「田舎高等学校教授あがりの先生が、高等学校あたりで用いられている女の小説家の作をテキストに使用するというのはだから、われわれを馬鹿にしている」と憤慨したという。今の時代に読むと、「田舎高等学校」とか「女の小説家」といった言葉に出る、明治時代の帝大生の偏見にまずは目が行ってしまいかもしれないが（そしてそんな時代性に注意を引くのも著者金子

の意図の一部だろうが、何より興味深いのは学生たちの英語観と漱石のそれとのギャップである。いよいよ授業が始まると、漱石のやり方は学生たちの神経を逆なでするものだった。

……私達は指名されると席を立て、中学や高校の生徒のようにリーディングをして、それから訳をつけさせられるのである。リーディングはかたっぱしから直されるので、当つた者は衆人環視の中で大きな恥辱を与えられる事になった。私達は大学生から逆転して再び中学生に戻されたような屈辱を感じた。

テキストの音読はその後も課され、いちいち発音を直された。単語や語句の意味も細かく確認される。学生たちは帝大生としてのプライドを傷つけられた。しかも英文学に関する講義の方は、理屈つぽすぎてノートの取りようもない。次第に受講者の人数は減っていったといふ[＊]。

こうした授業のやり方は漱石自身がかつて受けたディクソンの教授法を踏襲したものであったが、漱石の前任者ラフカディオ・ハーンがその直前までやっていた授業とはまったく正反対のもので、学生たちの反発は大きかったようだ。ハーンは文学の鑑賞に重きを置き、学生を読者として大人扱いしたが、漱石は「英語もできないクセに文学だの何だのとは十年早い」と言わんばかりに発音や解釈といっ

た基礎にこだわった。

漱石が後に帝大を辞し小説家となったことを考えるとこのような方針は意外とも思えるかもしれない。むろん、こうした境地に至るまでには紆余曲折もあつただろう。実際、漱石自身かつては、語学の基礎や文学史の知識などにこだわるディクソンの教授法におおいに不満を抱いていたのだ。しかし、言語を扱う科目への対応には、その人の考え方の深層が露出する。漱石が最終的に選び取った姿勢を見ると、言語習得や教育をめぐる方法や制度への彼なりの意識がうかがい知れる。根底にあつたのはある種のメンタリティ——官僚らしいといつてもいいそれ——なのである。漱石は教員の質の管理や生徒・学生の学業増進を、いかに制度面からコントロールするか、その方策を真剣に考えるようになっていた。

前回言及した「中学改良策」はまだ学生のとくに書いた論文であるにもかかわらず、すでにその考え方には役人のような視線が見られた。とりわけ教員の質をいかに維持するか、生徒に良い影響を与えるためにどのようなシステムを導入すべきかといった提案には、制度的な枠を通して現実を変えようとする思考が読み取れた。

こうした制度への関心は、漱石が長らく教育機関に身を置く中で醸成されたものかもしれない。学校という場では、多数の構成員に対し一括した対応を行う必要がある。毎年、同じようなルーティンも繰り返される。資格や身分

の認証も効率的に行わねばならない。つまり、教育機関では、処理のための「枠」が大きな機能を果たしやすいためである。しかも営利企業とはちがつて業績の上がり下がりに一喜一憂する必要もそれほどなく、勢い、「処理」そのものが自己目的化する。そこには事務の文化が育まれる特有の土壌があると言えるだろう。

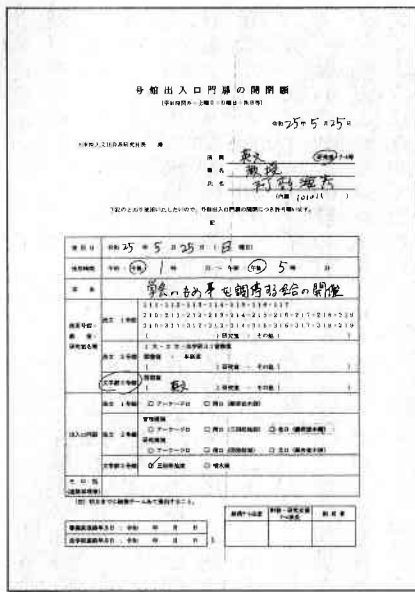
ちなみに私は大学に勤務しているが、組織の柱となるのが事務であることをいつも痛感してきた。予算の獲得と消化だけではなく、学生の授業料や教職員の給与にからんだ税務、細々した経費などの処理も重要だし、何よりも入試の実施や成績・単位の管理にはさまざまな事務作業が必要になる。教務係や総務係といった名実ともに「事務」に分類される部署だけではなく、研究職にある教員や学生自身も事務作業をこなせなければ立ち行かない。ところが、こうした事務作業は必ずしも学生や教員の本務ではないという認識もある。本来、学生や教員が力を入れるべき、そして評価の元となるべきはあくまで「学業」や「教育研究」だというのが少なくとも建前なのだ。そんな中で事務作業にも従事してきた経験振り返ってみると、その特性としていくつか目につく要素があるので、いったんそれらを元に「事務的なるもの」の見取り図を描いてみたい。

事務の顔——形式、注意、時間

の方法の形成に大きく寄与したフォルマリズム（形式主義）である。もともと形式に注目する批評は、一九二〇年代に英国の大学でI・A・リチャーズやウィリアム・エンブソンらが実践したテクスト中心主義的なアプローチに一つの起源を持つが、その後、構造主義へと展開していくこうした潮流は、米国の新批評やロシア・フォルマリズムの隆盛からも見て取れるように、地域ごとにそれぞれの特徴を伴いながら広がった。事務的な形式主義はしばしば無味乾燥で抑圧的で面白みのないものとして蔑まれるのに対し、批評では形式に注目することが言語表現の可能性をより可視化し、豊かな議論の場を生み出すと考えられてきた。それを支えたのは、言葉に表現の力を与えるのが言葉を発する個人だけではなく、そうした個人に発言を許す構造やコンテクストや制度だという考えだった。今ならそこに環境という概念を加えてもいいだろう。

事務の形式主義と形式主義批評とは無関係のものと言えらるのだろうか。事務周辺と現代批評のコンテクストとでそれぞれ「形式主義」が柱となったのは、決して偶然でも他人のそれら似でもなく、両者に何か共通してあることを示すのではないだろうか。一言で言えば、それは言語をはじめとしたメディア・媒体への敏感さである。言い方をかえれば、私たちは事務においても、形式主義批評においても、言葉を「言葉そのもの」として見る目を持つようになった。しかもこの目は、言葉を単に静止的なものとして

すぐに思い浮かぶのは——そしてこれは「事務的」と言ったときに誰もが真っ先に思い浮かべるものだろうが——事務では「形式」が何より尊重されるということだ。届け出や申告、依頼からレポートや論文まで、必ずフォーマットが決まっている。用件記入の方法や議論展開にもルールがある。これは事務には形式が必要だということでもあるが、そもそも形式を尊重する文化が先にあり、そこから事務的なるものが生まれたとも言える。



典型的な事務書類。言うまでもなく、「事由」欄にこうした逸脱的な記述があることはない。

形式といえれば想起されるのが、二〇世紀初頭以来、批評

だけではなく、動くもの、変化するもの、そしてだからこそ統御されるべきものとしてとらえる。

梅棹忠夫は「事務とは、事実上は『かく』ことである」とした上で、その全体像を次のように描いてみせる。

事務とは「現場におけるモノあるいはコトのながれを管理するために、それに対応するところのシンボルのながれをつくりだし、それを操作すること」である。シンボルとは、もちろん文字であり、数字であり、その集合としての文書である。

「シンボルのながれをつくりだし、それを操作すること」という表現は、事務のダイナミックな側面をとらえている。そもそも事務は人間の生きた現実を統御するために導入されるものだ。生きた現実には「シンボルのながれ」に変換され私たちの手元の紙面や画面に現れる。これらを統御し、管理することを通して、私たちは現実そのものを統御するのである。

統御と管理のためには形が守られねばならない。動くものや形のないうものに、いかに形を与え、枠の中に収めるかが事務の成否をわける。それを突き詰めると、作業として書くという行為にたどり着く。形式を意識しながらの文書作成には「生成する」「動く」という性質と、「止める」「定着させる」という性質とがともに備わっている。